

超大国はいかにして、その威信を失墜したか

マイケル・リンド（2004年5月31日 フィナンシャルタイムズ記事を翻訳）

イラクにおける大失敗は、新保守派（ネオコン）の夢 多国間外交と国際条約にあれこれ制約されない、慈悲深いアメリカ帝国の実現 に対する不信と疑念をつのらせてしまった。しかし、ファルージャの瓦礫に埋もれ、虐待が行われたアブグレイブ刑務所の露と消えてしまったのは、ネオコンの夢ばかりではない。多くの民主党員と中道派共和党員の何人かが別の選択肢として最近まで支持してきた路線は、多国間協調の安全保障機構を通じて米国が指導力を発揮することであったが、それもまた、ジョージ・W・ブッシュのイラク戦争による巻き添えを食いかねない。

冷戦終結以来、時に「人道的タカ派」とも「強硬国際派」とも称される新自由主義者（ネオリベラル）の多くは、米国の強大な軍事介入政策を支持してきた。しかしネオコンと違う点は、国連と北大西洋条約機構（NATO）の重視である。世界の民主化という米国の大望を追求するには国連とNATOを通じて行わなければならない、決して無視してはならない、と主張する。第一次湾岸戦争とクリントン政権が主導したNATOのバルカン諸国への介入のあり方が、唯一の超大国アメリカと多国間協調とのバランスを模索するネオリベラルのめざす方向だった。

ネオコンがイラクなどの「ならず者」国家に焦点を合わせたのに対して、ネオリベラルはリベリアのような「破綻」国家において国際的な協調路線を強力に推し進める好機があると考えてきた。米国の主導によってそこに国際保護領をつくり、治安と秩序をもたらして社会を再建するという。パレスチナについてこんな提案をした者もいる。イスラエル撤退からパレスチナ主権国家建国までのあいだ、国連とNATOによる保護領をつくったらどうかと。

アメリカンパワーは国際協調によって正当性を認められたもののために奉仕する このアイディアは実効が期待できる。アメリカの力はあっても正当性がないとか、正当性はあってもアメリカ抜きというのでは実効性に欠ける。ただ悲劇的なことに、米国にはもう、この戦略路線は残されていない。ブッシュは自らのネオコン戦略を失敗に導き、さらに次

期政権が採りうる国際協調路線の芽まで無意識のうちに摘んでしまった。理由は簡単。ネオリベラルも、ネオコンと同様、アメリカンパワーという神話を前提としていたからだ。

その神話には常に二つの構成要素がある。目に見える実体のあるものと、目に見えないモラル面だ。その実体あるものは、現政権によって愚かにもまず真っ先に破壊されてしまった。1989年以降の論評に、米国は古代ローマにも似た比類なき超大国となったというのがある。誤った見方ではあるのに、どうやら米国も同盟国もともに受け取ってしまった。そして皮肉なことに、米国の力を頼んだネオコンの夢を砕いたのは、ネオコンが主導したこの戦争だった。同盟国の協力をもってしても、米国はいまだアフガニスタンやイラク全土に秩序を回復できていない。それをするための兵力に不足する国防総省（ペンタゴン）は民間企業と契約し、捕虜の尋問も含めて米軍が成すべき基本的な任務まで請け負わせたのだ。なにがローマ、なにが帝国か。

アメリカンパワーという神話にとってさらに重要なのはモラル面である。米国史の負の側面、たとえば先住民の取り扱いや奴隷制、差別といった事実を世界は決して忘れていない。にもかかわらず多くの人々の目に米国は、ファシスト国家や共産主義国家と対峙する、自由で民主的な超大国と映ってきた。その自由主義国家アメリカのイメージは今や、占領者アメリカ、虐待者アメリカのイメージに取って変わられた。アブグレイブ刑務所の虐待行為は、もはや個別の事件として見過ごすわけにはいかない。ブッシュ政権がイラクやアフガニスタン、グアンタナモ湾、さらには米国の地において虐待を指示してきた、あるいは許可してきたという数々の証拠が集まっているからだ。

われわれがすでに知っている恐怖や、まだ知らない恐怖が明らかになったら、致命的な痛手を受けるのはネオコンのというよりネオリベラルの計画だろう。なぜなら、ネオコンは当事国や同盟国の賛同を得ようともせずに他国を侵略するが、ネオリベラルは、米軍は多国籍軍の一部として望まれるところに行くべきだというからだ。だが、たとえ国連の多国籍軍やNATOの一員だとしても、米国の兵士に自分たちの国にいてほしいと望む国民がどこにいるだろう？ また、どれほどの同盟国が自らも汚されるリスクを負ってまで米軍と手を結んでくれるだろう？ しかも、国連やNATOの介入にあたって米軍が力仕事を負わなければ、ネオリベラルの展望する強力な国際戦略は不可能なのだ。

さらに、破綻国家の問題。これは 1990 年代におけるネオリベラルの戦略課題であった。ワシントンは無政府状態から秩序を取り戻す術を知らない　そのことはイラクが証明してくれた。

ブッシュはアメリカンパワーの神話を気づかずに打ち壊してしまったが、その影響はまだ進歩的な国際主義者たちに出始めてはいない。タカ派ネオリベラルの多くは、ケリー候補が勝利すればヨーロッパやアラブ諸国、その他多くの国々は水に流してくれるだろうと期待している。そう願うしかない。ブッシュとその一派に傷つけられたアメリカの評判を、新政権はかなり回復できるはずだ。しかし、アメリカのイメージを修復するには世代が交代するまで、いや、それ以上の長い歳月を要することだろう。

2004 年の春は、米国の歴史ばかりでなく世界の歴史における転換点となるかもしれない。最近までブッシュ批判の人々も、イラク戦争は不幸だがちっぽけな出来事にすぎない、そのあとには慈悲深い米国が長期間にわたって世界の覇権を握るのだと考えることができた。だが、アメリカに対する「慈悲深くも絶大なパワーを持つ」という評価がいたく傷つけられてしまった今、米国が世界で果たし得る役回りは、ネオリベラルとネオコンの双方が追求してきたよりはるかに小さなものとならざるをえないだろう。ブッシュが再選されるとされないにかかわらず、その遺産はすでに明らかだ。

著者マイレル・リンドは、ニューアメリカ財団ホワイトヘッド・シニアフェロー、ならびに同財団の米国戦略プロジェクト・ディレクター